OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	「キャラ」を通じた友人関係における友人グループの影響について ： 心理的適応と居場所感の観点から
Author(s)	藤野, 遼平
Citation	大阪大学教育学年報. 2020, 25, p. 37-49
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/73994
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

「キャラ」を通じた友人関係における友人グループの影響について ―心理的適応と居場所感の観点から―

藤　野　遼　平[*1]

大阪大学[*1]

【要旨】

本研究では，現代青年に顕著なキャラを介した友人関係について，友人グループがどのように影響を与えているのかを検討した。本研究の目的は，キャラを介した友人関係に特徴的であるとされる友人グループの性質がキャラの有無及びキャラの受け止め方とどのように関連し，心理的適応に影響を与えているのかを明らかにすることであった。大学生171名に質問紙調査を行った。分析の結果，キャラの有無は友人グループの性質および心理的適応に関連が見られず，友人グループの性質である同調性と心理的距離が居場所感及び自尊感情に影響を与えていた。またキャラの受け止め方では，自尊感情にはキャラの積極的受容やキャラ行動が影響を及ぼしている一方で，居場所感には友人グループの性質である心理的距離と同調性が影響を及ぼしていた。以上の結果から，キャラは自尊感情を高めるものの居場所感とは関連せず，心理的適応を高めるためにはキャラを見直すよりも所属している友人グループの特徴を見直すほうが重要であることが示唆された。

1. 問題

1-1. 変容する現代青年期の友人関係

青年期における友人とのお互いの内面を通じた親しい関わりは健康な成熟への寄与という形で、発達および精神的健康を促進させる機能を果たすとされている。しかしながら，近年の青年の友人関係は，お互いに傷つけあわないように互いの内面に立ち入ることを避け、表面的に円滑な関係を取ることで満足してしまうといった希薄な関係へ変容していると岡田（2010）は指摘している。また千石（1985）は、現代青年は友人関係において一人になることを極端に恐れて群れ的な関係を取ることや、硬い話題や問題を避けてとりあえず楽しければそれでいいと考えること、互いに傷つけることを極端に恐れ相手から一歩引いたところでしか関わろうとしないといった特徴を指摘している。さらに、現代青年の友人との関わり方の変化として、上野・上瀬・松井・福富（1994）は現代青年における友人との同調性の高さについて示唆した上で、周囲との同調性が高い若者は他者の視線を気にする傾向が高いことを指摘しており，心理的距離が大きい一方で友人への同調性が強い「表面群」の存在を明らかにしている。さらに松下･吉田（2007）は上記のような特徴に加え，現代青年の希薄な友人関係が人間関係における閉鎖性・防衛性を強めていると指摘している。

このように，青年期は従来，友人との内面を通じた親密性の高い関係を築くことによって人格的な成長をなしてゆくとされていたが，現代青年は表面的な関係にとどまる希薄な友人関係にとどまる傾向があると数多く指摘されている。

1-2. 友人関係における「キャラ」

上述のような現代に特徴的な青年期の希薄な友人関係においては「キャラ」を用いたコミュニケーションが多用されると指摘されている（土井，2009；瀬沼，2007）。キャラとはキャラクターの略語であり、集団の中での個人の立ち位置や役割を表し，種類として、「天然キャラ：いつもボーッとしている人，間の抜けた人」，「いじられキャラ：からかいの対象となる人，遊ばれる人」，「インキャラ：陰気な人」などがある（山西，2013）。瀬沼（2007）は、キャラという言葉は1999年以降に青年の友人関係において現れ始めたと指摘し、バラエティ番組などに見られるようなキャラを介した人間関係が現実の友人関係に取り入れられることで定着したと論じている。キャラに関しては社会学的観点から多くの論考がなされてきたが、千島・村上（2015）では、それらの先行研究を整理し、キャラを「小集団内での個人に割り振られた役割や、関係依存的な仮の自分らしさ」と定義した。本研究でも以上の定義を採用する。

千島・村上（2015）は、大学生が友人関係の中でキャラがあることに対して「理解のしやすさ」「コミュニケーションの円滑化」「存在感の獲得」という３つのメリットを認知していることを明らかにしている。すなわち、キャラを介したコミュニケーションは、グループにおいて個人に役割と居場所を与え、分かりやすく楽しい人間関係を築くことに寄与していると考えられている。

一方，千島･村上（2015）では大学生がキャラに対し３つのデメリットを認知していることも明らかになった。１つ目にキャラによって他者を一面的にとらえてしまい、キャラ以外の特徴が無視され、表面的で相互理解の乏しい関係に陥る「固定観念の形成」、２つ目にキャラにあわない言動が制限され、キャラとは異なる自らの側面を表にできない「言動の制限」、３つ目にキャラの過剰な演じあいや押し付けが生じたり、一度キャラが固定されると演じ続けなければならない「キャラへの囚われ」が挙げられている。他にもキャラのデメリットとして，社会学や教育学の観点からは、遊びや悪ふざけとの境界線が曖昧である現代のいじめではキャラを介した「いじり関係」が「いじめ関係」へと発展しやすい問題について論考されている（土井，2009；本間，2009）。またキャラが「スクールカースト」と呼ばれる現代の日本の教室内において発生するカースト制度のような上下関係現象を引き起こすことも指摘されている（斉藤，2014；鈴木，2012）。

千島・村上（2016）では、中学生と大学生を対象として、キャラの受け止め方とキャラを演じることによるキャラ行動が心理的適応へと与える影響を明らかにする調査がおこなわれた。その結果、中学生ではキャラなし群が多く、大学生ではキャラあり群が多いことが示された。また、大学生においてはキャラがある者の方が無い者に比べ自己有用感が高いことも示された。さらに，大学生ではキャラを消極的にでも受容することは、自らの居場所感と正の関連を示すのに対し、中学生ではキャラ行動をするほど心理的適応は損なわれやすいという結果が得られた。このことは、与えられたキャラに合わせて振る舞うことの意味合いが、中学生と大学生では大きく異なることを示唆している。すなわち、大学生においては、比較的キャラを自分自身の一部として受容しており、心理的適応を保ちながらキャラを介して円滑に友人と付き合うことができるのに対して、中学生においては、付与されたキャラを受容しにくく、受け入れがたいキャラを演じることで、適応が損なわれやすいことが明らかになった。

1-3. キャラに対する友人グループの影響の可能性

このように，キャラを介した友人関係にはメリットとデメリットの両方が報告されている。そのうえで千島・村上（2016）は、上述の学校段階による結果が学校環境の相違に起因する可能性を示唆している。一般的には中学校の友人関係は教室の中で形成されることが多く、比較的閉鎖的な関係性であるのに対し、大学生は友人を作る機会や新たな人間関係を構築する場が数多く存在し、比較的オープンな関係性であるといえ

る。そのため、中学生では、限られた人間関係を壊さないようにキャラに合わせて振る舞わざるを得ないが、大学生ではキャラを付けたりキャラに合わせて振る舞ったとしても適応を損ないにくいと考えられるとしている。このことから，キャラに対し，周囲の環境要因とくに友人グループの性質がかなり大きな影響を与えていると考えられる。

では，キャラに顕著な友人グループの性質とはどのようなものであろうか。まず挙げられるのが、友人関係の希薄化とその進行によってもたらされる友人との心理的距離の遠さである。互いの内面を開示することなく、傷つけ合うことがないよう、表面的に円滑な関係を取るような友人関係である「優しい関係（土井，2009）」が現代の友人関係では特徴的であり，そのような友人関係においてキャラが用いられるとされている。キャラには属する友人グループ内において自らの立ち位置をはっきりとさせるとともに、友人と相容れないところがあってもそれを表にせずキャラによって覆い隠して、互いを傷つけあわないようにするといった表面的な関係に留まろうとする傾向があると示唆されており（瀬沼，2007），相手に気に入らないところがあってもキャラを振る舞わざるを得ないことによって適応を損ねていることが予想される。

２つめは、友人グループの境界の強固さと、それによってもたらされるグループメンバーの固定化である。現代の若い世代の人間関係は、「島宇宙化」と呼ばれるような無数なグループに分かれており、自分のグループ以外のほかのグループにはお互いに無関心であるという指摘がなされている（宮台，1994；瀬沼，2007）。加えて、教室内にできた小グループから一度排斥されてしまうと、元のグループには容易に戻れず、他のグループに入れてもらうことも難しいとされている。そのような中では，グループ内で配分された自らのキャラをはみ出すことは、グループから排斥されるばかりか，その後どのグループにも所属できず自らの居場所を危険にさらす可能性があるため，自身のキャラに疑問を抱いていても自らのキャラから外れることは積極的に避けられるとされており、このことが適応を損なわせている一因であると考えられる。

３つめは、友人に対する強い同調性を持つことである。同じ空間にいなくとも電子メールやインターネットのように多様化したコミュニケーション手段を用いて、常に「つながっている」努力をしていることが例として挙げられる。石本（2016）は「キャラ疲れ」と呼ばれる不適応状態を示しやすい理由として、教室内において決まったグループに所属し、同じ友人と常に一緒に行動している事に加え、教室内だけではなくSNSやメールを用いて常に繋がった状態であることを示唆している。

このように，キャラに対する友人関係の性質として上記の３つの特徴が挙げられる。石本（2011）は上記に示した３つの特徴は現代に顕著な友人関係の特徴であるとして心理的適応および学校適応との関連を検討している。その結果，上述の３つの特徴は心理的適応及び学校適応の低下と関連があることが示された。しかしながら，キャラに特徴的であるとされている上述の３つの特徴が実際にどのようにキャラへと影響を与え，心理的適応に影響を及ぼしているのかは明らかになっていない。

1-4. 本研究の目的

以上のような先行研究をふまえると、現代青年期を生きる若者はキャラと呼ばれるような、友人グループにおいて個人に割り振られた役割や、関係依存的な仮の自分らしさを用いていることが明らかになっている。キャラには居場所を与え楽しい友人関係を築く一助となるというメリットが存在する一方で，さまざまなデメリットもあり逆に自尊感情や居場所感を低下させる一因になっていることも指摘されている。しかしキャラを振る舞うこと及びそれによって生じる適応の度合いには所属している友人グループの性質も大きく関係していることが示唆されている一方で，キャラと友人グループの性質および心理的適応との関連は明らかにされていない。

よって本研究においては、友人グループの性質がどのようにキャラと関連して心理的適応に影響を及ぼしているのかを検討することを目的とする。

2. 方法

2-1. 調査対象者

関西地方の国立大学に在籍している大学生184名から質問紙を回収し、欠損値のある13名分の回答を除き、最終的に171名（男性67名，女性104名；平均年齢19.03歳，*SD*＝1.90）となった。男女別の平均年齢は男性19.27歳（*SD*＝2.83）、女性18.88歳（*SD*＝0.88）であった。

2-2. 実施手続きと倫理的配慮

調査時期は2017年７月～11月に行われた。授業時間の一部を利用して、調査協力者に一斉に質問紙を配布し、その場で回収した。調査は無記名式であり、回答は任意であること、回答を拒否したり中断したりすることができること、回答を拒否したり中断しても調査協力者に不利益は生じないことを紙面に明記し、口頭でも伝えた。なお、調査は著者の所属機関に設置された研究倫理委員会の承認を得て実施された。

2-3. 使用尺度

１．**デモグラフィック変数**：年齢、性別を尋ねた。

２．**キャラの有無と種類**：千島･村上（2015）を参考に､キャラの有無と種類について尋ねた。「あなたは、普段、友だちから『あなたは、____キャラだね』と言われることがありますか。自分が友だちからよく言われるキャラの名前を、下の空欄に書き入れてください。キャラが複数ある場合は、最もよく言われるキャラの名前を書いてください。」と教示し、「____キャラ」という空欄を１つ設けた。さらに、「思いつかない場合や「____キャラ」と言われない場合は、チェックを入れてください。」と教示し、「全く思いつかない」、「____キャラだと言われない」というチェック欄を設け、チェックを付けた者は、次の３．キャラの受け止め方および４．キャラ行動の質問には回答せず、それ以降の質問へと進むよう教示した。空欄にキャラ名を記入した者を「キャラあり群」とし､「全く思いつかない」､「____キャラだと言われない」のいずれかにチェックを付けた者を「キャラなし群」とした。

３．**キャラの受け止め方**（13項目）：千島・村上（2016）で作成された「キャラの受け止め方尺度」を用いる。下位尺度として「積極的受容（項目例：自分は____キャラであることがうれしい）」､「拒否（項目例：自分が____キャラだと言われるのは不愉快だ）」､「消極的受容（項目例：友達に____キャラと言われることはやむを得ないと思う）」､「無関心（項目例：自分が____キャラであろうとなかろうとどちらでもよい）」の４つが存在する。「３ページの質問で回答したあなたのキャラに関してお聞きします。以下の項目は、現在のあなたにどのくらいあてはまりますか。最もあてはまると思う数字を１-５から選んで、一つ丸をつけて下さい。」と教示し、５件法で回答を求めた。

４．**キャラ行動**（３項目）：千島・村上（2016）で作成された「キャラ行動尺度（項目例:普段から“____キャラ”としてふるまっている）」を用いる。教示および回答形式は３．キャラの受け止め方と同一であった。

５．**友人との心理的距離**（10項目）：キャラに顕著な友人グループの性質である友人関係の希薄化とその進行によってもたらされる友人との心理的距離の遠さを測定するために，金子（1989）の「友人との心理的距離尺度」を用いた。「３ページで思い浮かべて頂いた友人グループでのあなたについて、最もあてはまる

と思う数字を1-4から選んで、一つ丸をつけて下さい。」と教示し、4件法で回答を求めた。

6．**友人への同調性**（9項目）：キャラに顕著な友人グループの性質である友人への同調性を測定するために，石本ら（2009）の「友人への同調性尺度」を用いた。「3ページで思い浮かべて頂いた友人グループでのあなたについて、最もあてはまると思う数字を1-4から選んで、一つ丸をつけて下さい。」と教示し、4件法で回答を求めた。

7．**グループ境界の強固性**（7項目）：キャラに顕著な友人グループの性質である友人グループの境界の強固さとそれによってもたらされるグループメンバーの固定化を測定するために，石本（2011）の「グループ境界の強固性に関する項目」を使用した。「3ページで思い浮かべて頂いた友人グループでのあなたについて、最もあてはまると思う数字を1-5から選んで、一つ丸をつけて下さい。」と教示し、5件法で回答を求めた。

8．**自尊感情**（10項目）：山本・松井・山成（1982）で作成された「自尊感情尺度」を使用した。「次の特徴のおのおのについて、あなた自身にどの程度当てはまるかをお答えください。他からどう見られているかではなく、あなたが、あなた自身をどのように思っているかを、ありのままにお答え下さい。」と教示し、5件法で回答を求めた。

9．**居場所感**（13項目）：石本（2010）で作成された「居場所感尺度」を使用した。本尺度は「自己有用感」と「本来感」の2下位尺度から構成されている。本尺度には、関係性ごとに挿入する語句が異なる項目があるが、本研究では友人グループにおける居場所感を測定するため、「グループの皆」を挿入した。「以下の項目は、グループにおける現在のあなたにどのくらいあてはまりますか。最もあてはまると思う数字を1-5から選んで、一つ丸をつけて下さい。」と教示し、5件法で回答を求めた。

上述した尺度における5件法の回答ラベルは、全て「1．あてはまらない，2．ややあてはまらない，3．どちらともいえない，4．ややあてはまる，5．あてはまる」であり、4件法の回答ラベルは、「1．あてはまらない，2．ややあてはまらない，3．ややあてはまらない，4．あてはまらない」であった。

3. 結果

キャラの有無の割合と尺度の検討

まず、全体のデータでキャラの有無の割合を算出したところ、キャラあり群が102名（59.6%）、キャラ無し群が69名（40.4%）であった。また，千島・村上（2015）では，キャラの種類が「友人関係における役割」と「当人の性格特性」に分類されているため，本研究においてもその分類に当てはめる形で集計を行った。集計は，心理学を専攻する大学院生3名で行われた。その結果，キャラあり群のうち，友人関係における役割が41名（40.2%），当人の性格特性が59名（58.6%），キャラの複数回答により両方に分類できる者が2名（1.2%）であった。

キャラの有無に偏りがあるかを調べるためにχ^2検定を行った。その結果、有意な連関が示され（χ^2=6.37，df = 1，p < .05）、大学生ではキャラを振舞う者が多いという事が示された。次にキャラの有無と性差に関連があるかを検討するために、χ^2検定を行ったが，有意な連関は示されなかった（χ^2=2.51，df = 1，p ≧ .05）。

また、それぞれの尺度の項目において記述統計を求めた。その結果、キャラの受け取り方尺度における「キャラの拒否」因子の「自分が『____キャラ』と言われるのは，ふゆかいだ」という質問項目において床効果が見られた。また、心理的距離尺度における「私はその友だちグループのメンバーのことを非常に信頼

している。」「私はその友だちグループのメンバーと気があう。」「わたしはその友だちグループのメンバーと一緒にいると心が安らぐ。」の３項目において天井効果が見られた。さらに、グループ境界の強固性尺度において「友だちグループのメンバーは、私がグループの外の人と仲良くしていると怒る。」「友だちグループのメンバーは、私がグループの外の人と遊ぶことを嫌がる」「友だちグループのメンバーは、グループの外の人を仲間に入れてあげないことが多い」の３項目において床効果が、「友だちグループのメンバーは、グループの外の人が遊びに参加してきても嫌がらない」「友だちグループのメンバーは、グループの外にも友だちが多い」の２項目において天井効果が見られた。よって，以降の分析ではこれらの項目を除外して行った α 係数はそれぞれキャラの受け止め方尺度におけるキャラの積極的受容が α =.92，キャラの拒否が α =.79，キャラへの無関心が α =.81，キャラの消極的受容が α =.86であった。キャラ行動尺度は α =.86であった。友人との心理的距離は α =.85，友人への同調性尺度は α =.83，グループ境界の強固性尺度は α =.68であった。自尊感情尺度は α =.86，居場所感尺度における自己有用感は α =.86，本来感は α =.85であった。グループ境界の強固性の α 係数が低いものの，項目数の少なさを鑑みてそのまま採用することとした。

キャラの有無と心理的適応との関連

次にキャラの有無を要因とし、同調性、心理的距離、境界強固性、自尊感情、自己有用感、本来感の６つの変数を従属変数とした*t*検定を行った（Table１）。その結果、いずれの尺度においても有意な差は見られなかった。また，キャラあり群を「友人関係における役割」と「当人の性格特性」に分類したうえで，同様に同調性、心理的距離、境界強固性、自尊感情、自己有用感、本来感の６つの変数に差が見られるかを確かめるため１要因分散分析を行った（Table２）。その際，両方に分類された２名は分析から除外した。その結果，いずれの尺度においても有意な差は見られなかった。よって以降の分析では，キャラの種類による分類は扱わないこととした。

Table１　キャラの有無を要因とした友人グループの特徴および心理的適応に関する得点の*t*検定結果

	キャラあり（*n*=102）		キャラ無し（*n*=69）		
	平均	*SD*	平均	*SD*	*t* 値
同調性	2.38	0.54	2.29	0.58	1.12
心理的距離	1.98	0.59	1.88	0.54	1.11
境界強固性	2.12	0.91	2.27	0.84	-1.10
自己有用感	3.22	0.72	3.11	0.70	1.04
本来感	3.64	0.86	3.69	0.68	-0.41
自尊感情	3.05	0.74	3.02	0.78	0.25

Table 2　キャラの種類を要因とした友人グループの特徴および心理的適応に関する得点の分散分析結果

	友人関係における役割（*n*=42）		当人の性格特性（*n*=59）		当人の性格特性（*n*=68）		
	平均	*SD*	平均	*SD*	平均	*SD*	*F*値
同調性	2.43	0.48	2.33	0.56	2.28	0.58	0.96
心理的距離	1.97	0.56	1.96	0.61	1.89	0.54	0.38
境界強固性	2.23	0.84	2.03	0.92	2.27	0.84	1.37
自己有用感	3.23	0.84	3.21	0.63	3.10	0.71	0.56
本来感	3.59	0.86	3.69	0.87	3.69	0.68	0.25
自尊感情	2.85	0.76	3.16	0.72	3.04	0.77	2.03

次に、友人グループの性質である同調性、心理的距離、境界強固性の３つの因子が、キャラの有無を経て、心理的適応におよぼす影響の有無を検討するために、共分散構造分析によるパス解析を行った。有意でないパス係数を削除すると、適合度指標は $\chi^2(12)=11.74$，GFI=.981，AGFI=.957，RMSEA=.000，AIC=43.742であった。Figure 1 に最終的なモデルを示す。同調性は自尊感情と自己有用感に弱い負の有意なパスを示しており、心理的距離は自己有用感と本来感に中程度の負の有意なパスを示していた。一方、キャラは友人グループの性質からも心理的適応へも有意な影響関係を示さなかった。

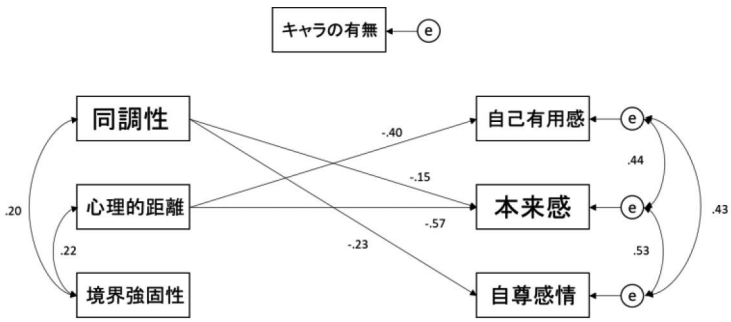

Figure 1　友人グループの性質とキャラの有無，および心理的適応の関連

キャラの受け止め方と友人グループ、及び心理的適応との関連の検討

以降の分析はキャラに関して尋ねた項目を使用するため、キャラあり群102名のみを分析対象とする。

友人グループの性質である同調性、心理的距離、境界強固性の３つの因子が、キャラの受け止め方の４つの因子とキャラ行動の１因子を経て、心理的適応におよぼす影響の有無を検討するために、共分散構造分析によるパス解析を行った。Figure 2 に最終的なモデルを示す。適合度指標は $\chi^2(36)=28.07$，GFI=.95，AGFI=.91，RMSEA=.00，AIC=88.07であった。

友人グループの性質からキャラの受け止め方へは、同調性と心理的距離がキャラの拒否に弱い正のパスを示していた。またキャラ行動へは心理的距離が弱い正のパスを示していた。心理的適応には同調性が自己有用感へと弱い負のパスを，心理的距離が自己有用感と本来感へと中程度の負のパスを示していた。

キャラの受け止め方からキャラ行動へは，キャラの積極的受容と消極的受容が弱い正のパスを示していた。心理的適応にはキャラの積極的受容が自尊感情と本来感へと弱い正のパスを示していた。またキャラへの無関心が本来感へと弱い正のパスを示していた。キャラ行動は自尊感情へと弱い負のパスを示していた。

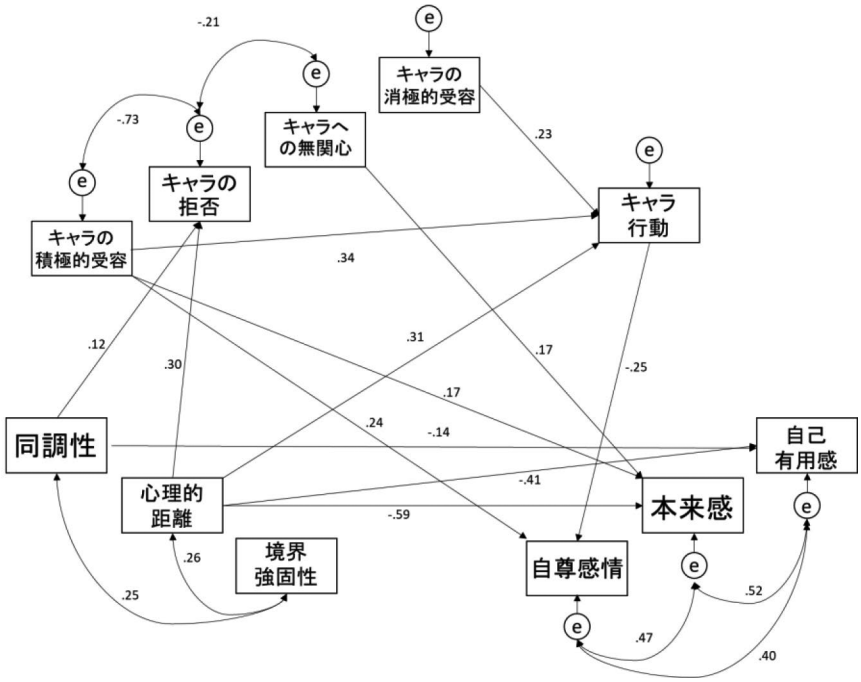

Figure 2　友人グループの性質とキャラの受け止め方および心理的適応の関連

4. 考察

キャラの有無および尺度の検討

キャラの有無を比較した結果、キャラがある者がキャラのない者より多かった。これは大学生においては、友人関係の中で異質性を許容する傾向が高まることで、キャラを有する者の割合が多くなる一方で性差は見受けられないといった千島・村上（2016）の結果と一致する。

尺度については，キャラの拒否尺度と心理的距離尺度およびグループ境界の強固性尺度について天井効果および床効果が見られた。心理的距離及びキャラの拒否が天井効果および床効果を示した理由として，調査対象者の発達段階の影響が考えられる。心理的距離の発達段階による相違については，先行研究でも一貫した結果を得られておらず，石本ら（2009）では心理的距離について学校段階間の有意な差は示されていないが，石本（2011）では中学生に比べて高校生は心理的距離が遠いという結果が示されている。一方で，保坂・岡村（1986）は，青年期の友人関係の発達は内面的な互いの類似性の確認による一体感（凝集性）を特徴とし心理的距離が遠いchum-groupから，心理的距離が知覚内面的にも外面的にも互いに自立した個人としての違いを認め合う共存状態のpeer-groupへと移行するとしている。そのうえで心理的距離尺度を用いた先行研究として，金子（1989）では女子大学生も心理的距離尺度に回答していたが，女子高校生からの回答もデータに加わっており，石本ら（2009）と石本（2011）では中学生から専門学生までの発達段階で回答されたも

のであり，大学生を対象とした本研究とは発達段階が異なる。そのため，心理的距離が近いpeer-groupを形成する発達段階である大学生を対象とした本研究では心理的距離尺度において天井効果が表れたのではないかと考えられる。また心理的距離はキャラの拒否へと影響を与えており，心理的距離の近さがキャラの拒否を緩和したため，キャラの拒否尺度においても床効果が表れたのではないかと考えられる。

境界の強固性についても同様に年齢とともに低くなることが示されている（石本，2011）。加えて，境界強固性尺度は中高生および専門学校生を対象として開発しているが（石本，2011），大学生では中高生と異なりクラスでの友人関係がなくなるなど友人関係が成立する環境が異なるため，友人グループが強固に固まっておらず、グループに外部から誰かが参加してきたり、グループメンバーが他のグループとも親しくしていることが当然のものとして受け止められているとされている。その結果，境界の強固性尺度においては大学生は中高生および専門学校生より境界の強固性を強く感じることがないため，天井効果および床効果が多くみられたのだと考えられる。

キャラの有無と心理的適応度の関連

対応のない *t* 検定によって、キャラの有無によって心理的適応及び友人グループの性質において差がない事が示された。またその中でも、キャラの有無によって自己有用感による差が見受けられないことは先行研究における結果と異なっている。千島・村上（2016）では、大学生においてキャラがあることは、周りから存在を認められ、友人に関心をもたれているという肯定的な意味合いとして捉えられているため自己有用感が高まるとしていたが、それとは異なる結果が示された。千島・村上（2016）は，キャラがあることによって自己有用感が高まる理由として，キャラを付与されることによって周りから存在を認められ，友人に関心を持たれて居場所感を得るという肯定的な意味合いとして捉えていると推察している。しかし石本(2016)は，キャラがあることが自己有用感につながるというよりも，キャラをどのように受容しているかが自己有用感ひいては友人関係満足感に影響していると指摘しており，本研究の結果はキャラの有無が即ち自己有用感に影響を及ぼしているわけではないことを示していると考えられる。

また共分散構造分析によるパス解析によって、友人グループの性質である同調性が本来感と自尊感情に弱い負の影響を、心理的距離が自己有用感と本来感に中程度の負の影響を与えていることが判明した。石本ら(2009）は、中学生は、心理的距離と同調性が共に高い密着群がchum-groupに対応するとした一方で、高校生以降は心理的距離が近く同調性が低いといった特徴をもつpeer-groupに対応するとしている。また上野ら(1994）によれば、同調性が高い若者は他者の視線を気にする傾向が高いとされている。よって、大学生においては、同調性が高いことは他者の視線を過剰に気にするあまり本来の自己を振る舞うことができずわずらわしさを感じたり、そのような自分へ嫌気がさすことにつながるため本来感及び自尊感情が低下したのではないかと考えられる。また心理的距離においても，石本ら（2009）によれば心理的距離が遠い孤立群や表面群は心理的距離が近い密着群や尊重群に比べ、学校生活享受感や自己肯定意識が低い事が示されている。本研究の結果は、グループにおける居場所感や自尊感情においても心理的距離の遠さが同様の影響を与えることが示された結果であると考えられる。

また，境界強固性が心理的距離と同調性と共変関係にある一方，境界強固性自体は心理的適応に影響を及ぼしていない。このことから，境界強固性が直接心理的適応を損なわせるのではなく，それがグループの同調性を高めたり心理的距離を遠くすることによって心理的適応を損なわせることが推察された。

また，キャラの有無は友人グループの性質にも心理的適応にも関係を示さなかった。このことは，キャラに特徴的であるとされているグループの性質がキャラによるコミュニケーションを促し，そしてキャラを用

いた友人関係が心理的適応を損ねているという従来のキャラへの指摘と異なる。本研究の結果は，むしろ同調性や心理的距離といったグループの性質が直接心理的適応に影響を及ぼしており，キャラとグループの性質および心理的適応との間には直接関連がないことを示している。そのため，キャラは心理的適応を左右するものではなく，心理的適応を高めるためには友人関係におけるキャラを見直すことよりもむしろ所属している友人グループを見直すことの方が重要であることを示していると考えられる。

キャラの受け止め方と友人グループの性質との関連

友人グループの性質がどれほどキャラの受け止め方及びキャラ行動を経て心理的適応に影響を与えたかを検討した結果、同調性の高さと心理的距離の遠さがキャラの拒否へと弱い正の影響を与えていることが明らかになった。また、心理的距離の遠さがキャラ行動へも弱い正の影響を与えていることが明らかになった。同調性が高いほどキャラを拒否する理由として、前述のように大学生においては、心理的距離が近く同調性が低いpeer-groupに対応しているとされている。大学生にとって、同調性の高い友人づきあいはわずらわしさを感じるものであり、その様な特徴をもつグループにて振る舞うキャラは、押し付けのように感じてしまいキャラを拒否したくなるのだと思われる。また石本ら（2009）によれば、現代青年の友人関係は心理的距離が遠く、同調性が強いことが特徴であり、そのような特徴を持つ群を表面群として研究を行ったところ、自己表明･対人的積極性において表面群は他の群に比べて有意にその値が低い事が示された。このことから、心理的距離が遠のくことは自己表明や対人的積極性を低めることが示唆されており、その結果、他者から押し付けられたキャラを、拒否感を抱きつつもそのことを表明できずにいる可能性が挙げられる。また、心理的距離が遠いほどキャラ行動が行われやすいことに対して、上野ら（1994）は、心理的距離が遠く同調性が高い表面群の特徴として、同調行動をとってはいるが、集団中心の生き方を望んでいるのでも、協同的であるのでもなく、心理的には友人たちと離れていて、ただ集団から外れまいと群れ集っている可能性を推察している。小川・佐々木（2018）も大学生がキャラを用いる理由として、キャラに抵抗できないことやコミュニケーションを維持したい、場の空気を壊したくないという思いがあることを報告している。またキャラ行動から自尊感情への弱い負の影響も先行研究では見られなかったが本研究において現れたことから，グループに対して心理的距離を感じていることがキャラへの拒否感を抱かせつつも，逆に集団から疎外されないようにとキャラ行動をとらせ，そのような振る舞いをすることにより自尊感情が低下するといったプロセスの可能性が考えられる。

さらに本研究においては先行研究において見られていた，キャラの積極的受容が自己有用感に与える影響とキャラへの消極的受容が本来感及び自己有用感に与える影響が見られず，むしろ心理的距離および同調性が自己有用感および本来感に影響を及ぼしていた。このことから，自己有用感や本来感という居場所感にはキャラの受け止め方よりもグループの性質がどのようなものであるかが強く影響を及ぼすことが明らかになった。自己有用感が居場所感へ影響を与えた理由として，石本（2011）では発達段階が上がると心理的距離は自己受容には影響を及ぼさなくなる一方で学校生活享受感には変わらず影響を及ぼすことが明らかになっている。このことから，友人への心理的距離は大学生の発達段階においては自己受容や自尊感情などの自己概念には影響を及ぼさなくなる一方で，居場所感や学校生活享受感といった周囲の環境の受容には影響を与え続けることが理由として考えられる。また同調性について，葛西・松本（2010）は承認欲求と同調性との間に有意な関連があることを示し，他者に認められたいと思うがゆえに本来の自分の思いと異なってでも他者に同調してしまう現代青年の傾向を指摘している。本研究において，同調性が本来感へ負の影響を与えていたことは発達段階による同調性の忌避に加えて，他者に認めてもらうために同調してしまうことで自

身の本来感を抑えてしまうことが理由として考えられる。一方で，自尊感情に対してはキャラの受け止め方及びキャラ行動が影響を与えており，グループの性質は影響を与えていなかった。このことから自尊感情についてはキャラをどのように受け止め，行動するかが影響を及ぼしていることが明らかになった。小川･佐々木（2018）によれば，キャラを介したコミュニケーションは，キャラと自己概念との間において戸惑いや納得のいかない思いをすると指摘されている。しかしながら，本研究ではキャラを積極的に受容できることはむしろ自分を肯定的にとらえることができ自らに価値を見出して満足感を得ることができることが示唆された。一方，キャラを用いてコミュニケーションを行う際には，キャラに抵抗できない思いや自己の軸の無さを感じるとしており，このことがキャラ行動を行うことが自尊感情を損なう理由であると考えられる。

本研究の限界

本研究の限界として，対象を大学生としている点が挙げられる。キャラ議論の中心的な対象は中高生であるとされており（石本，2011），キャラのデメリットについての報告も中高生を対象としたものが主である（土井，2009）。特に中学生はキャラがあることによって心理的適応を損ねていることが指摘されていることから（千島・村上，2016），中高生を対象として同様の結果が見られるかどうかを検討する必要性があると思われる。以上の課題から中高生を対象としたキャラを介した友人関係の研究が蓄積されることが期待される。

付記

本研究は2017年度大阪大学人間科学研究科修士論文および2nd Regional Meeting of International Society for Adolescent Psychiatry and Psychology（2018年6月）にてポスター発表した内容に再分析を加えまとめたものです。

引用文献

千島雄太･村上達也 2015「現代青年における“キャラ”を介した友人関係の実態と友人関係満足感の関連―“キャラ”に対する考え方を中心に―」『青年心理学研究』26，129-146頁.
千島雄太・村上達也 2016「友人関係における“キャラ”の受け止め方と心理的距離―中学生と大学生の比較―」『教育心理学研究』64，1-12頁.
土井隆義 2009『キャラ化する／される子どもたち――排除型社会における新たな人間像』岩波書店.
本間友己 2009「いじられキャラ」となっている子をどう考え、どう支援するか」『児童心理』63，530-534頁.
保坂　亨・岡村達也 1986「キャンパス・エンカウンター・グループの発達的・治療的意義の検討――ある事例を通して」『心理臨床学研究』4，15-26頁.
石本雄真 2010「青年期の居場所感が心理的適応，学校適応に与える影響」『発達心理学研究』21，278-286頁.
石本雄真 2011「現代青年における友人関係の特徴と心理的適応および学校適応との関連」『発達研究』25, 13-24頁.
石本雄真 2016「現代青年の友人関係を捉える新たな視座をより充実したものにするために――千島・村上論文への意見論文」『青年心理学研究』27，171-176頁.
石本雄真・久川真帆・齋藤誠一・上長　然・則定百合子・日潟淳子・森口竜平 2009「青年期女子の友人関係スタイルと心理的適応および学校適応との関連」『発達心理学研究』20，125-133頁.
金子俊子 1989「青年期女子の親子・友人関係における心理的距離の研究」『青年心理学研究』3，10-19頁.
葛西真記子・松本麻里 2010「青年期の友人関係における同調行動――同調行動尺度の作成」『鳴門教育大学紀要』25，189-203頁.
松下姫歌・吉田芙悠紀 2007「現代青年の友人関係における“希薄さ”の質的側面」『広島大学大学院教育学研究科紀要』56（3），161-169.
宮台真司 1994『制服少女たちの選択』講談社.
小川将司・佐々木淳 2018「大学生の“キャラ”と自己の在り方をめぐる葛藤過程」『心理臨床学研究』35（6），573-583頁.
岡田　努 2010『青年期の友人関係と自己――現代青年の友人認知と自己の発達』世界思想社.

斎藤　環 2014『キャラクター精神分析』筑摩書房.
瀬沼文彰 2007『キャラ論』STUDIO CELLO.
千石　保 1985『現代若者論――ポスト・モラトリアムへの模索』弘文堂.
鈴木　翔 2012『教室内カースト』光文社.
上野行良・上瀬由美子・松井　豊・福富　護 1994「青年期の交友関係における同調と心理的距離」『教育心理学会研究』42，21-28頁.
山本真理子・松井　豊・山成由紀子 1982「認知された自己の諸側面の構造」『教育心理学研究』30，64-68頁.
山西治男 2013「若者」現代用語の基礎知識編集部（編）『現代用語の基礎知識2014年版』1173-1181頁 自由国民社.

How Friend Groups Affect Friendship Through "*Kyara*" −From the viewpoints of psychological adjustment and sense of place−

FUJINO Ryohei*1

Osaka University*1

【Abstract】

This questionnaire study investigated how a group of friends influences the relationship between friends through "*Kyara*" that are prominent in modern youth. The purpose of this study was to clarify how the characteristics of friend groups, which are characteristic of friendships with "*Kyara*", are related to the presence or absence of "*Kyara*" and how they are perceived, and how these characteristics affect psychological adjustment. A questionnaire survey was conducted on 171 university students. As a result of the analysis, the existence of "*Kyara*" was not related to the nature and psychological adaptation of the friend groups, and synchronism and psychological distance within the friend group affected their *ibasho* (sense of interpersonal rootedness) and self-esteem. In addition, in the process of accepting "*Kyara*", positive acceptance and "*Kyara*" action affected their self-esteem, and synchrony and psychological distance affected their *ibasho*. The above results indicated that "*Kyara*" was not related to the *ibasho* of the person who raises their self-esteem, and that it seems more important to reconsider the features of the friend groups to which the person belongs rather than reexamining "*Kyara*" in order to evaluate psychological adaptation.